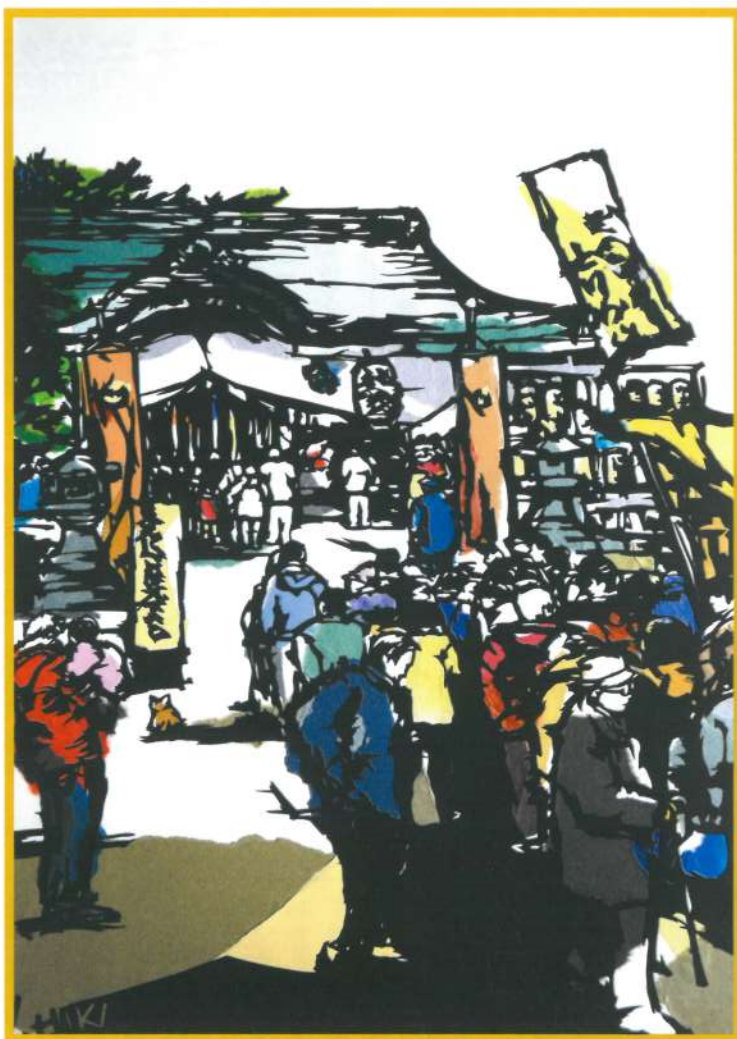


切り絵  
比企善彦作



茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所

茨木市元町4-3

072 (622) 2346

http://www.

ibarakijinja.or.jp/

## 遷宮と新生

いよいよ今年十月、伊勢の神宮では第六十二回式年遷宮が斎行されます。

伊勢の地に天照大神様が奉斎されてより約二千年、国の平安と五穀豊穡が祈り続けられてきました。二十年に一度、社殿の全てを建て替える「式年遷宮」の制度は天武天皇によって定められ、第一回の式年遷宮が持統天皇四年(六九〇年)に行われました。

これ以降、社殿の様式、大きさ、材料等何ら代わることなく今日に受けつがれているのです。では、それ以前はどのようなようであったかは記録がないため定かではありません。ただ「日本書紀」の記述のなかで天武天皇元年の記述「伊勢神宮」に対し、それより古くはいずれも「伊勢大神の祠」と表記されています。この時代に「祠」から「宮」へ、明らかにその規模が大きくなったことが窺えます。

私達の祖先は、神様を迎える「社・祠」を年毎に新たにすることによってご神威・ご神徳をより一層甦生・更新されることを願ってきました。

規模が大きくなることは相当長期にわたる計画と準備が必要となります。年毎の造替が難しくなっても清々しく尊厳なる姿を保ちつづけたい気持が「祠」から大規模な「宮」になっても「式年の制」を定めることによって常に大神様の甦りを願ったのです。

昭憲皇太后御歌  
新宮に斎きまつりて皇神のみいつもさらに改まるらむ

二十年ごとに斎行される神宮の御遷宮。今年はお出雲大社でも六十年ぶりに遷宮が執り行われました。全国津々浦々の神社で毎年繰り返される夏祭や例祭などの祭祀。この繰り返すことが重要であり、生命の根源に回帰する、初心に還ることに他なりません。自己の神性を取り戻すところに祭祀の意義があります。

# 茨木音楽祭2013 開催



風薫る五月。今年で第五回目となる茨木音楽祭がこどもの日の五日に実施されました。今年も中央公園グラウンドを中心に、市内各所で様々なイベントが催されました。当神社の境内も「鑑賞の杜」と呼ばれる、緑竹む異空間として多くの参加者が訪れました。境内では、音楽家による様々な演奏が繰り広げられたほか、工作コーナーではたくさんの子供たちが夢中になって物作りを楽しんでいました。茨木音楽祭は音楽を通じて地域の発展や活性化をもたらしていますが、それは主催者やボランティアの方々の努力により、常に新鮮さを失わず、毎回工夫を

凝らした企画で運営されているからです。

今回は特に環境への配慮を考え、境内で使用する食器類は使い捨てのものを使用せず、「ゴミを出したくない。環境にダメージを与えたくない」をテーマに、一般参加者へも「ゴミゼロ運

## 奉賛会だより

四月十八日午後二時より当社の祈年祭(春祭)にあわせて、奉賛会厄除安全祈願祭が斎行されました。その後、会場を参集殿2階に移し総会が行われました。

総会では、神宮並びに皇居遙拝、国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和、木内会長挨拶、宮司挨拶と続き審議にはいり会計決算・予算・事業計画が承認されました。その他、会員の方から、神宮の式年遷宮の後、神宮参拝を企画して欲しい旨のご要望がありました。会長は、役員会を開き十一月頃にはお参りできるよう検討したいとの返答がありました。

動への理解、協力を呼びかけていました。限りある資源を大事にして、日々の生活のなかで「もったいない」「ありがたい」を意識付けるよい機会になったのではないのでしょうか。神様のお計らいにより今年も天候にも恵まれ、大変な盛況かりでした。

総会終了後、宮司より「日継と遷宮」と題し講話がありました。その後、直会があり、会員相互の親睦を図り盛会裡に終了いたしました。

奉賛会では、随時会員を募集いたしております。年会費は三千円です。詳しくは社務所までお問い合わせ下さい。



### これからの主な行事

#### 大祓神事

六月三十日  
午後二時斎行

茅の輪

くぐり

厄除神楽

茅の輪守・粽授与

#### 夏祭

七月十三日

宵宮

十四日

本宮 午前十時斎行

神輿渡御 神楽奉納

#### 末社琴平神社例祭

九月十日

#### 例大祭(秋祭)

十月十日 午前十時斎行

#### 七五三詣

十一月中随時

祈祷者にお守り・おみやげ授与

#### 末社恵美須神社例祭

十一月二十日

#### 天石門別神社記念祭

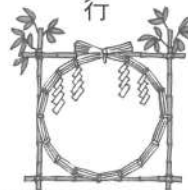
十一月二十二日

#### 新嘗祭

十一月二十三日

#### 大祓・除夜祭

十二月三十一日



## 日本の偉人

## 本居宣長

本居宣長は、享保十五年（一七三〇年）、伊勢国松坂（三重県松阪市）の木綿問屋の子として生まれしました。少年時代から習字を習い、漢籍を学び、執筆もするようになります。商人にむかないと感じた母親は、医者になることを勧め、二十三歳の時に京都に出て医学を学びます。そのかたわら儒学、漢学も学びますが、荻生徂徠や契沖に影響を受け、日本固有の国学（※コラム参照）に身を入れるようになります。

二十八歳の時に故郷松阪に帰り小児科医を開業、医師名を春庵と号して診療をするようになりました。そして自宅では、『源氏物語』の講義や『日本書紀』などの研究に励みます。

それまで『源氏物語』の評価はさほど高くありませんでした。光源氏を中心に多くの女性達との情を描いたもので、儒教や仏教の立場からは低俗な書物という評価だったのです。宣長は『源氏物語』の中から「もののあわ

れ」を見いだします。ものあわれとは、何かものごとに対していづく感動や情緒、しみじみとした思いをいい、「よの中の物のあはれのかぎりを、書きあつめて、よむ人を深く感ぜしめんと作れる」作品が『源氏物語』だと主張しました。今、『源氏物語』が平安文学の最高峰と言われるようになったのは宣長が一翼を担っていると言えます。

宣長は日本人本来の世界観や価値観の探求のためには『古事記』解説が必要であると確信し日本史上、最初の体系的な注釈書『古事記傳』をその半生三十五年かけて著します。『古事記』は日本最古の現存する古典で、和銅五年（七一二年）に太安万侶によって編まれました。ただ正史でなく、また変体漢文という表記で解説が難しく、その研究が本格的に成されることはなく江戸時代前までは、一般にはほとんど知られていませんでした。『古事記傳』の準備に取りかかったのは三十五歳の年であり、

全巻を書き終えたのは六十九歳の六月です。七十二年の生涯のうち、脂ののつた三十代から亡くなる三年前まで宣長は『古事記傳』一つに熱中しました。もちろんこの間、源氏物語論や『玉勝間』等膨大な量の書物を完成していますが、それらすべて『古事記』の解釈を行うための補助学であり、『古事記傳』の副産物といえます。

それまで『日本書紀』一辺倒だった時代の中で、『古事記』こ

## 国学

とは、江戸時代に興った学問で、わが国の古典によって仏教・儒教が伝来する以前のわが国民の国民性や文化を見いだした学問です。

宣長は、国学の入門書といえる『うひ山ぶみ』で、国学を「神学」「有職の学」「記録」「歌学」の四つに分けています。神学は神社や神道といった日本の古くからの信仰について学ぶもの。有職の学は、律令や法制、儀式のきまり、宮廷での装束、武家の儀礼などを研究する有職故実。記録は『日本書紀』をはじめとする六国史や世の移り変わりを記した歴史書をも

そが古えのいつたえをそのま  
ま今に伝えていいる書物であり、  
そのため「道を知る第一の古  
典」という認識を広めました。

生涯二百冊以上の著作と一万  
首の歌を詠み、五百名近い弟子  
と鈴と山桜をこよなく愛しまし  
た。書齋を「鈴屋」と呼び、ま  
た山室山にある宣長のお墓には  
山桜が植えられています。

敷島の大和心を人問はば

朝日に匂ふ山桜花

とに、時代を見つめ直す。歌学は、  
字のとおり歌学びですが、歌を詠  
むためには、古い歌に対する認識  
が無くてはなりません。そのため  
に古い歌を訳し意味を極める日本  
の古典文学に対する学問です。

ただ一般的に国学と言いますが、  
この名称が定着したのは明治時代  
になってからです。宣長の時代に  
もすであつた言葉ですが、「国  
学の四大人」（荷田春満・賀茂真  
淵・本居宣長・平田篤胤）の一人  
と言われている宣長ですが「いた  
くわるき言ひさま」と言つてあま  
り好まず代わりに「古学」という  
言葉を用いています。

## 二社の皇大神宮

今年十月二日には伊勢の皇大神宮(内宮)の二千年に一度の遷宮が斎行されます。皇大神宮にお祀りされている神様は、天照大神さま。大神様が伊勢の現在の処にご鎮座されたのが、第十一代垂仁天皇のとき。天皇の皇女倭姫命が大神様の鎮まるべき良き処を求めて各地を巡幸し、いまの処に至りて「伊勢の国は、…傍国のうまし国なり。この国に居らむと思う」との神託を得てお鎮まりになられたと伝えられています。

さて、天照大神をお祀りする神社は全国各地にあつて、いづれも皇大神社と呼ばれています。当神社には、「皇大神宮」「皇太神社」のふたつの社がありま



皇太神社



皇大神宮

す。「皇大神宮」は奥宮「天石門別神社」の東側にあり、御鎮座の経緯は定かではありません。

しかし棟札に書かれた「元和八年九月十日修造」が当神社現本殿の創建の年月日と同じであることから、三神を祀る現本殿が新たに創建される時に合せて修造(造り改める)されたと思われる。また、明治十二年の茨木村誌「神社明細書」には、かつて上中条村近くの茨木川の傍らに鎮座し、宮地を「五十鈴森」、茨木川を「身潔川」とも「五十鈴川」とも呼んでいたと書かれています。おそらく、織豊時代の茨木城郭形成過程で、宮地がそれまでの現宮元町から現在地に遷された同し頃、「皇大神宮」も現在地に遷されたのではないかと考えられます。

本殿手前東側にあるもうひとつの「皇太神社」は、もと上中条村の氏神として村内に鎮座され

ていましたが、明治四十一年、神社合祀令によって現在地へ遷座されました。上中条村は、慶長七年(一六〇二年)に「村」として成立しますが、「皇大神宮」が当神社へ城郭形成で遷された

## 御奉納報告

「島下郡の祇園祭」として歴史と伝統を伝える当社の夏祭りは、戦後、都市化に伴い、子ども達も増加し、子ども達にも祭に参加して祭を盛り上げるとともに、ふるさとの思い出としてもらうため、最盛期には八基の子供神輿が購入されました。平成に入り少子化が進み子ども

後、氏神として勧請してお祀りした社が「皇太神社」ではないかと考えられます。同じ境内に同じ神様を祀る「社」が二社ある神社は、大変めずらしいのです。

も神輿奉仕者を小学生から中学生・女性に範囲を拡げてきましたが、中学生が担ぐには子供神輿は小さく、予てからの懸案事項となっていました。

このような中、この度、祭礼委員長として多年、夏祭の斎行にご尽力戴いています林政義様により、新たに中学生用のお神輿として、荘厳美麗なお神輿を御奉納戴きました。厚く御礼申し上げます。



3月23日 神輿奉納報告祭斎行